

河和田地区の各町は、江戸時代には「今立郡〇〇村」やった。明治二十二年に町村制になって「今立郡河和田村〇〇」となった。さらに昭和三十一年三月に鯖江市に合併して「鯖江市〇〇町」になった。その時小坂を河和田町にかえ、清水町は同名の町があったので、東清水町にかえた。北中は、明治十年ごろまでは中村、上沢は江戸時代に日方村ともいうた。上河内は、明治になって「上」をつけたけど、それまでは「河内」っていうた。「越前の七河内」いうての、越前には河内が七つもあって、それがどこも谷の一番奥の村なんや。

ここには、古い話がいっぱい残ってるでの。ほな上河内からはじめようかの。

① 榎の崖のアカツルベ

上河内の天谷橋を渡ると、左側にはきれいな谷川、右側にはけずりとられた崖の「榎の崖」にさしかかる。昔ここは大きな榎の木が生い茂って細い道におおいかぶさり、昼間でもうす暗うて

気味が悪いところやった。一度もお日さまの光がさしたことがなく、しめっぽいので、自分のぞうりの音が誰か追いかけてくるように聞こえて、大人でもいつの間にか早足になった。

ほして、この榎の崖では、暗くなると榎の木の茂みからアカツルベがスルスルッと下りてきて、道を通る人をおどかしたそうや。びっくりして川にはまって怪我した人もいたんやと。雨の夜などアカツルベにすりよられては大ごとやと走ったり、日なた（沢）の道へ遠まわりして帰った人もあったんや。

困ってしもった村では、道端にお地藏さんをたてた。ほして、大人も子どもも村中の人が無事を祈って手を合わせて通るようになったんやと。ほれからは、お地藏さんがみんなの願いを聞きとどけて下さっての、いつしかアカツルベは出んようになったんやといの。

今ではもう、アカツルベを見たもんは誰もおらんようになってしもたんやけど、いったいどんな姿やったんかのう。

